



戦争なんか **大**キライ 3

戦場にみる滋賀県民の戦争体験

はじめに

いまから60年前に、世界の多くの人をまきこんだ戦争がありました。滋賀県からも多くの人たちが、外国にでかけて戦争をしました。そして、戦争にでかけていったお父さん、子どもたち、お兄さんやお姉さんを心配する家族や友だちがたくさんいました。

外国にでかけていった多くの人たちは、ふるさとである滋賀県に二度とかえることはできませんでした。

戦争が終わって、滋賀県だけではなく、日本全国、そして世界中で何百何千万人分もの、悲しみやくやしき、ときとして怒りがのこりました。世界中のだれもが、もう戦争はイヤだ、平和な世界がなによりも大切なんだと思いました。

あのとき、世界のみんながもった気持ち——戦争なんか大キライ、平和な世界を！という気持ちをいつまでも忘れずに、世界の人たちといっしょにもちつづけるために、滋賀県では、平和祈念館という施設をつくることにしています。

この本は、戦争中に起きたできごとのうち、滋賀県の人たちが戦場（その多くは外国です）で体験したことや、家族が戦場に行った人たちの体験や気持ちをまとめたものです。

もしみなさんが、滋賀県と戦争のことを調べてみたいと思ったら、じっさいに戦場に行った人たちや、家族が戦場に行った体験のある人たちのお話を聞いてみてください。また、いま世界で起きている戦争のことや平和な世界をつくるためのいろいろな取組みのことも調べてみてください。

この本を読んで感じたことや、わからないことがあったら、お手紙やEメールをくださいね。

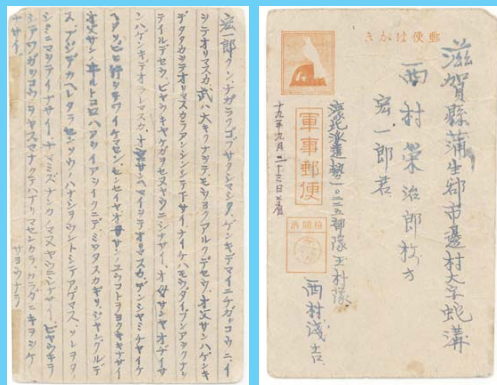
※平和祈念館はまだ仮の名前です。

もくじ

こうちゃんの宝物 ^{たからもの}	P2. 3
	みんなこのお月さまを見ているんだ
P4. 5	
南の海で 毛布を洗う ^{もうふをあらう}	P6. 7
P8. 9	
お兄ちゃんの予言	
宇野栄一 ^{うの えいち} さんのこと	P10. 11
	まっ赤なお陽 ^ひ さんがしずむ
P12. 13	
ぼくはあの日のことを 忘れない ^{わす}	P14. 15
P16. 17	
戦争は終わっても…	
滋賀県民が関係した戦場	P18. 19
P20. 21	
平和のたまごの物語	
	1. なくなる戦争 2. 古ぼけた一枚 ^{まい} の写真
平和のたまごの物語	P22. 23
	3. 平和のたまごを育てよう
P24. 25	
	「世界」と「いま」につながっている滋賀県と戦争しらべてみよう！ 世界の戦争のこと・平和のこと

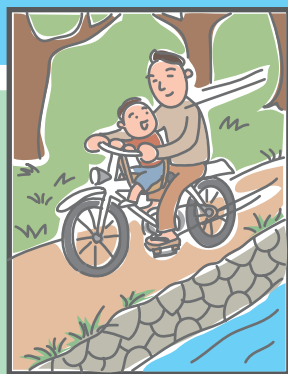
こうちゃんの宝物

ようかいち にしむら こういちろう
八日市市の西村宏一郎さんがとても大切にしているハガキです。いまから60年前お父さんの浅吉さんが戦場から小学2年生の宏一郎さんに書き送ったハガキです。



戦争中にお父さんから9通のハガキがとどきました。そのうち2通は宏一郎さんにあてたものでした。このハガキには、昭和19年9月23日にとどいたと記されています。

こういちろう
宏一郎くん、長らくごぶさたしました。元気で毎日学校に行っておりますか。武は大きくなって、もうよく歩きましょう。お父さんは元気で戦っておりますから安心して下さい。内地はもうだいぶ暑くなっているでしょう。病気やケガをせぬようにしなさい。お母さんやおじいさんは元気でられますか。お宮さんへまいっておりますか。電車道や池へ遊びに行ってもいいですね。先生やお母さんの言うことをよく聞きなさい。お父さんのいるところは暑い暑い国で、見わたすかぎりジャングルです。無事で帰れたら戦争の話をうんとしてあげます。それを楽しみに待っていなさい。生水なんか飲まぬようにしなさい。病気をしては学校を休まなくてはなりませんから、体に気をつけなさい。さようなら



大好きなお父さん

こういちろう
宏一郎さんは子どものころ、こうちゃんとよばれていました。東洋レーヨン（いまの東レ）で働くお父さんと、お母さん、そして幼稚園に通うこうちゃんは大阪市で暮らしていました。お父さんはこうちゃんを自転車に乗せて瀬田川沿いを走ったり、かたぐるましてくれたりする、やさしいお父さんでした。



父ちゃんいかんとして

昭和18年4月こうちゃんは小学校に入学しました。そして、5月には弟の武くんが生まれてにぎやかな毎日をすごしていました。ところが、秋になったある日、お父さんに軍隊に入るようにという召集令状がとどきました。お父さんは兵隊さんになって戦争に行かなければならないことを、こうちゃんに伝えなくてはなりませんでした。



南の島からとどいた手紙

お父さんは戦争に行くと、いつこうちゃんたちのもとへ帰れるかわからないから、お母さんとこうちゃん、武くんの3人は、おじいちゃん、おばあちゃんのいる八日市でお父さんの帰りを待つことにした。家族や近所の人たちに見送られお父さんは出かけていった。年が明け、春がきてこうちゃんは2年生になった。そしてお父さんから待ちに待ったハガキがとどいた。



兵隊さんの服を着たお父さんと1歳のこうちゃん。昭和13年にもお父さんは中国との戦争に出かけていったけど、その時には無事に帰ってきた。

電車道や池へ遊びに行ってもいいですね

お父さんが手紙を書いたところは、オランダ領ニューギニア（いまのインドネシア・パプア州）といわれたところ。ハガキの表には「濠北派遣...」と書いてあるけど、オーストラリアの北の方に行ったということだよ。そこは赤道の直下だから、一年中暑くて島の多くはジャングルにおおわれている。お父さんは、こうちゃんが線路や池など危険なところで遊んだりしてないか心配したり、武くんの1歳のお誕生日のことだっちゃん覚えていて、そのことをハガキに書いたりしているんだよ。遠い南の島でお父さんは、こうちゃんや武くん、お母さんのことを考えながら、ハガキを書いたと思うよ。



帰らなかったお父さん

戦争が終わって、こうちゃんはお父さんが帰る日をいまかいまかと待っていたけれど、「昭和20年8月12日ニューギニア・マノクワリの第125兵站病院で戦病死」という悲しい書類がとどいた。お父さんは戦争が終わる3日前病気のために亡くなっていたんだ。



どうして戦争は起こるんだろう

こういちろう
宏一郎さんは60年前のことをふりかえって、「お父さんは帰ってくると思っていた。小さかったから、戦争のイメージと死ということとはつながらなかった。」と話してくれた。孫の環ちゃんは、時々おじいちゃんあてのハガキを読んだりする。カタカナの文章は読みにくいけど、おじいちゃんの話聞いて「なんで戦争があるのやろう。」って話してくれたよ。本当にそう思うよね。「どうして戦争は起こるんだろう」ということをみんなも考えてほしいな。

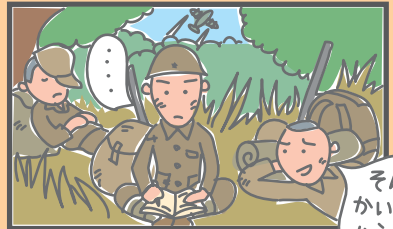


お父さんからのハガキを見る西村宏一郎さん、孫の環ちゃんは小学5年生

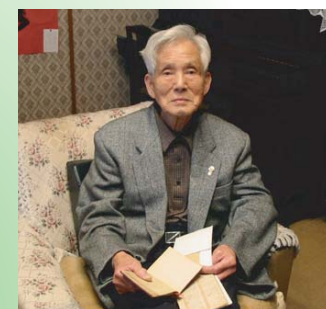
みんなのお月さまを見ていますんだ

生きているしるし

小林さんがビルマに行ったころには日本軍は負けていて、空には敵の飛行機ばかり。小林さんたちは敵機に見つかりやすい昼間は、草むらなどに隠れていました。みんなはたいてい寝ていましたが、小林さんはその間に日記を書きました。小林さんは、戦場で今日も生きていたというしるしに日記を書いたのです。



そんなにかいて生きてかえれるとおもてるのか？

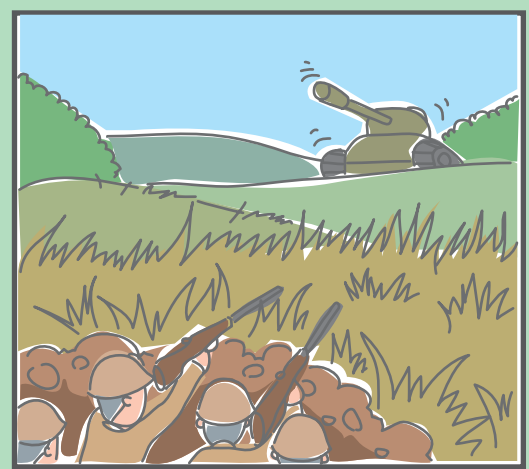


小林育三郎さん
手にしているのが、昭和19年3月27日広島を港を出発した日から、昭和20年8月28日までの日記。日記の最後には、戦争に負けてこれからどうなるのかという不安な気持ちが書かれている。

古いメモ帳には小さな文字がびっしりと書かれています。守山市の小林育三郎さんがビルマ（いまのミャンマー）で体験した毎日のできごとを書いたものです。そのころ、ビルマは戦場で小林さんは戦っていました。

おっかあ

昭和19年8月28日の深夜、小林さんたちは雨の中を移動していた。夜明け前、現地の人々の集落が見えてきた。そこに暮らす人たちは避難して誰もいなかった。小林さんたちは家に入り眠った。夕方、敵の飛行機からの激しい攻撃が始まったけれど、逃げ出すこともできず、床にふせるしかない小林さんたち。その時市川さんという兵隊さんが撃たれてしまった。市川さんは小林さんのひざの上で、「おっかあ」と言って死んでいったんだ。



9人全員死んでいます

小林さんは、重機関銃中隊に所属していた。昭和20年3月27日、中隊長の青地さんが戦死したので、中隊長の代理になった小林さんは、部下たちのいる場所を離れた。その後、敵の戦車が激しく攻撃してきた。ようやく攻撃がおさまり、みんなのところにもどってみると、そこにいた9人全員が死んでいた。小林さんは、いまでもその日のことを忘れられないという。小林さんの日記には、その日亡くなった人のことが書かれている。戦闘が続くと多くの人々が死んでいく。それが戦場だということがわかるかな。

敵って何だろう

小林さんの日記や話の中に、「敵」という言葉がなんども出てくる。「敵」は敵の飛行機、敵の戦車、敵の攻撃だったりする。そこで「敵って何ですか」と小林さんに聞いてみた。小林さんは「戦っていたのは、イギリスとインドの軍隊」と教えてくれた。さらに聞いてみた「敵も人間だとは思わなかったのですか」と。小林さんは少し悲しそうな顔をして「そんなことを考える余裕はなかった。だから、戦争は残酷で悲惨なのです。人と人が殺し合うことは絶対にしてはいけません。」と話してくれた。小林さんたちが戦っていたイギリスやインドの軍隊も、小林さんやいっしょに戦って亡くなった人たちと同じように、家族がいてふるさとでの生活があった一人ひとりの人間であることを、みんな想像してみてください。そうすると、人間同士が殺し合いをする戦争が、どんなに愚かなものかということが見えてくると思うよ。



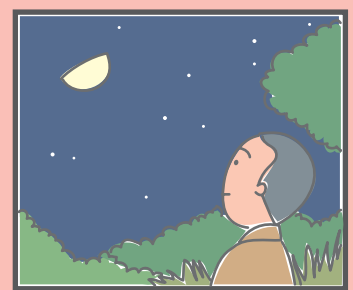
小林さんの話を聞いて

平成14年2月、守山中学校の2年生に小林さんはビルマでの体験を話した。小林さんの話を聞いてみんなは思ったり感じたりしたことを書いてくれたよ。「今回一番感じたことは、命の価値観だった。いまだからこそ戦争や人の命の価値を考える必要があると思った。」
「何十年かたつと戦争の悲惨さを聞けなくなるかもしれないので、貴重な体験ができてよかったです。」
「戦争というもの私たちがすぐ近くで起こっていたということを感じました。昨日、家に帰ってから私の祖父にも戦争の話をお聞きしました。」



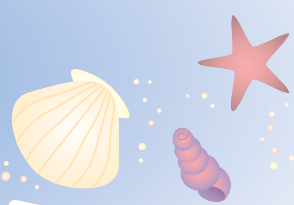
お月さまとホタル

小林さんの日記には、今日の夕食は塩をかけただけのごはんだったとか牛肉とパイヤのごちそうだったとか、食べものについてたくさん書かれています。「食べることが楽しかった。」「ビルマのホタルを見ると、守山のホタルまつりを思い出した。」と小林さんは話してくれたよ。それから、スイカのような形のお月さまを見ながら、お月さまはこの世でたったひとつだから、お父さんやお母さんもこのお月さまを見ているんだなあと思ったと話してくれたよ。



野洲郡中主町の木村ますさんは看護婦さんでした。昭和14年、ますさんの家に一通の書類がとどきました。それは戦場でケガや病気をした兵隊さんの看病をするため集合するよという通知でした。ますさんは、兵隊さんと同じように、お父さんやお母さん、近所の人たちに見送られ、中国の戦場へと出かけて行きました。

南の海で毛布を洗う



ますさんは日本赤十字社滋賀県支部救護看護婦養成所(いまの大津赤十字看護専門学校)を卒業しました。そのころ日赤の救護看護婦さんたちは、軍隊からの呼び出しがあれば必ず行きます、という約束をしていました。だから、ますさんは戦場に行くことを「しょうがないなあ」と思ったそうです。



滋賀県から中国へ行くお医者さんや看護婦さんたちの出発前の写真。3列目右から7番目がますさん。

着いたところはヤシの島

昭和16年、ますさんは中国から無事に帰ることができた。でも2年後、再び通知がきてまた戦場へ行かなければならなかった。着いたところは、日本から南へまっすぐ下って赤道を少しこえたあたりにあるニューブリテン島のラバウル(いまのパプアニューギニア)だった。

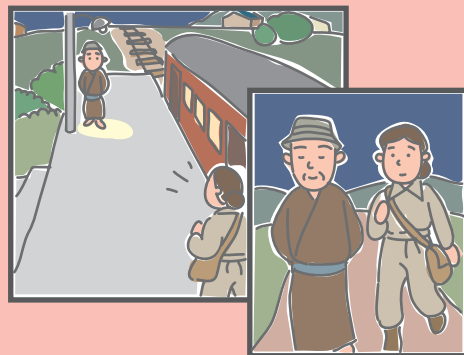
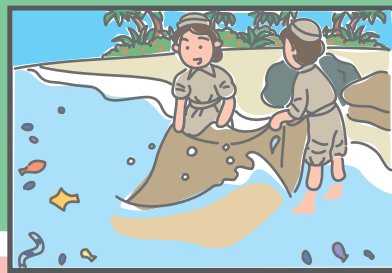


ネズミにかじられる

ラバウルには、まわりの島々から、激しい戦場でケガをした兵隊さんがたくさんやってきた。兵隊さんたちは少しケガが治るとまた戦場へとどっていった。その様子をますさんは「元気でないのに元気なふりして、前線に出ていく兵隊さんがいっぱいいてはった」と話してくれた。その兵隊さんたちはどうなったんだろうね。ますさんたちの仕事は毎日とても忙しく、夜は疲れていたから、小さなネズミに足をかじられていることも気づかないくらいぐっすり眠っていたそうだよ。

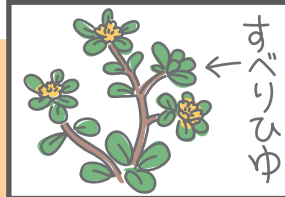
毛布を洗うしかなかった

病院の裏は海だった。ますさんたちは、時々患者さんが汚した毛布を海で洗った。ますさんは「あつこの海は熱帯魚やら色のついたウミヘビやらいて、きれいなもんですわ。軍隊の毛布は重たいでねえ、洗うのはたいへんでしたけど、薬もないし、そういうことしかできひんのですわ。」と話してくれた。



土のぬくもり

戦争が終わり、ますさんたちは山を下りた。その途中でも多くの兵隊さんが亡くなっていた。大きな水たまりにブカブカ浮いている兵隊さん、もう骨だけになってしまった兵隊さんもいたんだ。戦争が終わった翌年、ますさんは日本へ帰ってきた。お父さんが野洲駅までむかえにきてくれたんだ。お父さんと2人で中主の家まで歩いて帰った。フィリピンでは、草やコケの上を歩いてきたから、ふるさとの道はあたたかく、土のぬくもりを感じたって、ますさんは言っていたよ。



すべりひゅ



木村ますさん。ますさんは、ラバウルを出発したとき、乗っていた船が攻撃され沈没したんだ。救助されるまでの6日間、海の中で過ごした。船が沈没したときも、海で漂流中に飛行機から攻撃されたときも、多くの人々が亡くなった。

スベリヒユひとかけ

昭和19年、ますさんはフィリピンのマニラの病院で仕事をしてたけれど、爆撃が激しくなって、病院にいる人たち全員は北の方の山の中へ逃げたんだ。だけど、そこも爆撃が激しくなって、ますさんたちは山の奥へ奥へと逃げこんだ。ますさんは、「一日に何人亡くなったかわかりません。薬も何にもないんやさかい」と話してくれた。食べるものもなくて、道に生えている草を食べるようになった。飯ごういっぱいのお湯にスベリヒユという草を一かけいれたのが一回の食事。そういう暮らしは戦争が終わるまで続いた。

大切ないのち

その後、ますさんは助産婦(助産師)さんになった。ますさんは「赤ちゃんが生まれはって、お風呂に入れてきれいにして、服を着せて寝さしたりすると、やっぱりふっとね。あの兵隊さんらも、こういうように生命をもらってきたのに、ああいう死に方をしてなと思うことがありますね。」と話してくれた。みんなが生まれたとき、お母さんやお父さんは、この小さいいのちを大事にしようと思ったと思うよ。その大切ないのちを簡単に、たくさん奪ってしまうのが戦争。そんなことがなぜなくなるんだらうと思う。



ますさんは84歳。いまでも赤ちゃんをお風呂に入れたり、新米お母さんの相談にのったりする、パワフルなおばあちゃんだ。



お兄ちゃんの子言

お兄ちゃんにもらった ランドセルとお弁当箱

お兄ちゃん、すみ子さんは兄弟8人。一番上の宗男さんは、末っ子のすみ子さんをとてかわいがった。すみ子さんは、小学校の入学のお祝いにランドセルとお弁当箱をプレゼントしてもらった。だけど、宗男さんはすみ子さんの入学するすがたを見ていない。その前の年、宗男さんは家族や近所の人たちに見送られ、いまの中国の東北の方に兵隊さんとして出かけていったんだ。



甲賀郡甲賀町の奥島すみ子さんには、15歳上のお兄ちゃんの宗男さんがいました。昭和15年8月、お兄ちゃんは兵隊さんになって戦場へ行きました。4年後、お兄ちゃんは短い時間でしたが家に帰ってきました。その時、お兄ちゃんはすみ子さんにあることを伝えました。10歳のすみ子さんにはその言葉の意味がわかりませんでした。ナゾの言葉を残してお兄ちゃんは再び戦場へ行き、二度と家に帰ることはできませんでした。

お兄ちゃんはみんな兵隊さんになった

宗男さんには、一重さん、義治さん、勝之さんの3人の弟がいたけど、みんな兵隊さんになった。そして、宗男さんと一重さんはフィリピンで亡くなった。戦争が終わるまで日本には、20歳から40歳までの男の人は、国が命令すれば兵隊さんにならなければならないという決まりがあった。そして、戦争が始まると、多くの男の人は兵隊さんになって戦場へ行った。戦争が激しくなると、宗男さんたちのように兄弟全員が兵隊さんになるということも珍しくなかったんだよ。お父さんやお母さんはどんな気持ちだったんだろう。すみ子さんは「父や母は悲しかったりはしなかった。お国のためにという時代だったから」と話してくれた。だけど、心の中ではどう思っていたんだろうね。



兵隊さんになる直前の宗男さんと6歳になったばかりのすみ子さん

すみ子さんと奥島さんの家。いまから64年前、宗男さんはここから出かけていった。



ぼくのお嫁さんは決めないで

昭和19年6月、宗男さんの部隊は日本にもどってきた。ある日突然、宗男さんから家に帰るという知らせが届いた。2時間しか時間がないけれども、おモチがほしいと書いてあったので、田植えをしていたお父さんとお母さんはあわてておモチつきの用意をした。お父さんもお母さんも、そしてすみ子さんも宗男さんに会えることをとても喜んだ。宗男さんは、つきたてのおモチをもったすみ子さんを自転車の荷台に乗せて近くの駅まで行った。自転車をこぎながら、宗男さんはすみ子さんにお父さんとお母さんへの伝言を頼んだ。そうして、駅ですみ子さんは宗男さんを見送った。これが「お兄ちゃん」との最後の別れだった。

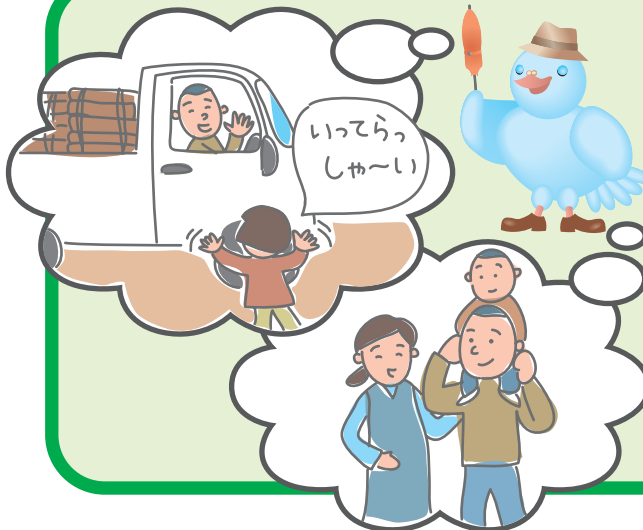


生きて帰れるとは思わない

お兄ちゃんがすみ子さんに伝えたことは、「兄ちゃんの部隊があかんようになったら、日本はもうあかん」「ぼくのお嫁さんは決めないように」ということだった。そのころは、東南アジアや太平洋の島々では、日本軍はアメリカを中心とした連合軍から激しい攻撃を受けていた。だから、中国からどんどん軍隊を東南アジアや太平洋の島々へ向けて移動させていた。宗男さんの部隊もそのひとつで、フィリピンに向かったんだ。だけど、宗男さんは、日本は戦争に負けることを、そして宗男さん自身も生きて帰ることは難しいということを知っていたと思う。



もしも戦争が なかったら



60年ほど前までの日本では戦争にそなえて、若い男の人の多くは、お国のために兵隊さんになって行かなければいけない国だった。宗男さんは、21歳で兵隊さんになって26歳で亡くなった。みんなのまわりにいる21歳くらいの人って何をしているかな。大学や専門学校せんもんがくの学生、サラリーマン、大工さんとか職人さんを目指す人もいるかな。みんな自分のやりたいことを自由にえらべるよね。兵隊さんになる必要のない時代だったら、宗男さんはどんなふうに過ごしていたのだろうって、考えてしまう。

小学校を卒業するまでは京都で暮らしていた栄一さん。幼稚園の発表会の写真。ポーズをとっているのがかわいいよね。



三重県の二見海岸で海水浴。お父さんのひざに抱っこされているのが栄一さん。



小学校入学のころの栄一さん



飛行服すがたの栄一さん

宇野栄一さんのこと

いまから70年くらい前、習字が得意な男の子がいました。将来は先生になりたいと思っていましたが、その後、陸軍のパイロットになりました。そして21歳の春、爆弾を積んだ飛行機で沖縄のアメリカ軍の艦船に向けて飛び立ち、再び帰ってくることはありませんでした。

あこがれのサッカー部に入部したけど

師範学校のころは、京都を離れて寮で生活していた。いまの高校生くらいのころの栄一さんは、クラブはサッカー部に所属。一生懸命練習したけど足が遅くてレギュラーにはなれなかった。サッカーより柔道の方がうまかったって、クラスメートだった大津市の下村利治さんが教えてくれたよ。



滋賀県師範学校附属小学校高等科のみんな。高等科は小学校6年の上の学年。栄一さんは、京都市内の小学校を卒業して、師範学校の附属小学校高等科に入学、そして師範学校に進学した。



1

おしゃれな？栄一さん

ある日、そのころはやっていたバンカラ・ファッションをしてクラスメートをびっくりさせた栄一さん。学校生活を楽しんでいたんだね。でも学校には配属将校という軍人がいて、軍事教練という軍隊の訓練をする授業があった。国のために軍隊に入るようにというすすめもあった。そのころは戦争の時代だったんだ。



陸軍のパイロット

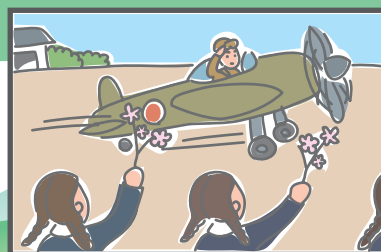
昭和18年9月には、師範学校を卒業して、大津市中央国民学校（いまの大津市立中央小学校）の先生になることが決まっていた。でも、栄一さんは「陸軍特別操縦見習士官第一期生」という陸軍のパイロットのテストに合格。先生ではなくパイロットを目指した。



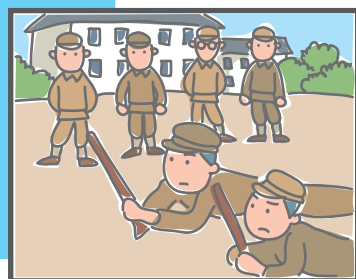
鹿児島県にある飛行学校に入学した栄一さん。訓練のようす。右から4人目が栄一さん。生まれて初めて飛行機に乗ったときはビクビクしたってお母さんあての手紙に書いているよ。

自分のいのちとひきかえに

念願のパイロットになった栄一さん。でも、中国、東南アジア、太平洋にわたる広い戦場では、日本軍はゆたかな物資をもつアメリカを中心とした連合国軍の激しい攻撃を受け、次々に負けていった。昭和20年になると日本の都市も空襲という空からの攻撃を受け、一般の人々が被害を受けるようになった。そしてアメリカ軍は沖縄までせまってきた。昭和20年3月、栄一さんは特攻（特別攻撃）訓練を受けていた。爆弾を積んだ飛行機でアメリカ軍の船に体当たり攻撃する訓練だよ。攻撃前に飛行機から脱出することはできない、パイロットの命とひきかえに「敵」の船を破壊しようという計画だった。



にあうやろ



お父さんとお母さんの心

栄一さんは、昭和20年4月アメリカ軍が沖縄に上陸した2週間後、爆弾と片道だけの燃料を積んだ飛行機に乗って、沖縄に向けて飛び立ち再び帰ってくることはなかった。そして4カ月後に戦争は終わった。栄一さんは一人っ子だった。栄一さんが亡くなると、京都に住んでいたお父さんやお母さんは生まれ故郷の草津にもどり、琵琶湖のほとりで暮らした。お父さんは、ときどき栄一さんが通った師範学校にそうじのボランティアに行ったりして過ごした。栄一さんを失った悲しみはとても深いものだったと思うよ。



戦争という暴力

特攻（特別攻撃）は、自分自身を武器の一部にして攻撃するってことだよ。戦争のころは、そんなとんでもないことを日本の国は考え、その求めに応じる若い人たちがいた。栄一さんもその一人だった。戦争は、とてつもなく大きな暴力だと思わないかい。一人の人間に死ぬことを命令したり、大人も子どもも関係なく多くの人の命を奪ったりする。そういった戦争という暴力が、世界ではいまでもあちこちで、多くの人たちにふるわれ続けているということを考えてほしい。

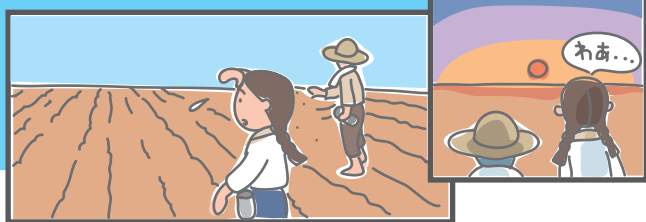
70年ほど前、いまの中国の東北の方に、日本の軍隊が起こした戦争をきっかけに「満州国」という国ができました。そこには、日本から多くの人たちがうつり住みました。滋賀県の人もいました。しかし、「満州国」は戦争が終わるとともになくなり、多くの日本人たちは、つらい日々を過ごさなければなりませんでした。

農業をするために

満州には農業をするために、「開拓団」というグループでうつり住んだ人たちがいました。甲賀郡水口町の川島淳子さんは、お父さん、お母さん、弟のこうちゃん、妹のあっちゃんによっちゃんの6人家族でした。淳子さんたちは、甲賀郡の人たちが集まった甲賀郷開拓団のメンバーとして、昭和20年3月、家族全員で満州にわたりました。そのころ淳子さんは16歳でした。

広い広い大地

淳子さんが話してくれた満州のこと。「満州はなんせ広いから地の果てにまっ赤なお陽さんがしずむで。とにかく一生懸命歩いたから、畑の畝が長いから、いっぺん向こうの端まで行って帰ってきたら昼になるねん。」



まっ赤なお陽さんがしずむ

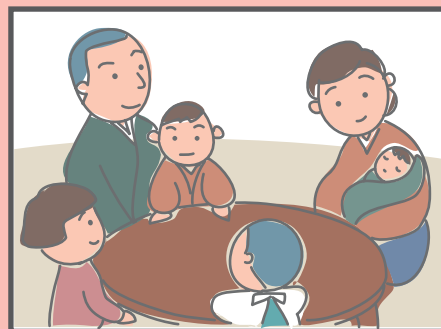


あっちゃん、あっちゃん帰ろ

昭和20年8月9日、ソ連（いまのロシアなど）の軍隊がアジアの戦争に参加し、満州へとせめてきて、開拓団の人たちは住んでいる村から逃げた。6日後に戦争は終わったけれど、淳子さんたちは日本に帰ることもできず、やがて冬がやってきて「燃料がない。着るものも食べものもない。お金もない。母は栄養失調と寒さで死んでしまいました。」と淳子さん。その後、苦しい生活のなか、お父さんは妹のあっちゃんを中国の人の家庭にあずけた。半年後、日本に帰れるという知らせを聞いた淳子さんは、妹のあっちゃんをむかえに行った。そして家族5人は、昭和21年10月、日本に帰ることができた。

中国へお引越

お父さん 小林早苗さんは堅田で生まれました。昭和16年、早苗さんが2歳のとき、お父さんが働いていた工場が、「満州国」の安東にうつることになり、お父さんはお母さんと早苗さん、弟の広君を連れて安東へうつり住みました。安東では、妹の喜久子ちゃんと弟の幸雄君も生まれ、6人家族は幸せな毎日を送っていました。しかし、昭和20年5月には、お父さんが軍隊に入り、その3ヵ月後戦争が終わりました。



歩きつづけた80キロの道

戦争が終わり、食べるものもなくつらい1年を過ごした。やっと、日本に帰ることができるという知らせがあったけど、お母さんと、早苗さんたち5人は船に乗せてもらえるところまで移動しなければならなかった。汽車に乗ることもあったけど、80キロの山道を歩くこともあった。

家族の命を守ったお母さん

お母さんのヒサさんが話してくれた、歩いてる途中のつらいできごと。「川は戦争で橋が落ちたから、腰まで水につかって渡らんなん。夜になったら野宿せんなん。食事はないうですよ。コーリヤンを食べたのかなあ。毎日毎日3人、5人と子どもが死んで、年寄りも死んでいかはった。せやけど、埋葬している間がないから、道ばたにほっていかん



早苗さんたちは、全員無事でふるさとの堅田（いまの大津市堅田）に帰ることができた。でも、お父さんは病気のために亡くなっていた。

らん。そこを通るときは、みな手を合わせて通りました。」そして、早苗さんは「母は29歳だったんですよ。それで4人の子どもを一人で連れて帰ったんですよ。一人背負って、一人だっこして、両脇に荷物をぶら下げてその母のすがたを思い出すと涙がでますねえ。私も50年たって、やっとしゃべれるようになりました。」と話してくれたよ。

消えた国、消えない悲しみ

「満州国」は、日本が中国の国のなかにつくった国なんだ。そこには、広い土地や石炭・鉄鉱石などの豊富な資源があった。もちろん中国の国のなかだから中国の人たちが最も多く住んでいた。日本の企業などは土地を安い値段で買って工場を建てたり、日本の国はその土地で日本人たちが農業をするようにという政策を進めたりした。「満州国」の政治や経済の重要な部分は日本の軍隊、役人、企業がにぎっていて、中国の人たちの多くは苦しい生活を送っていたんだ。中国の人たちはどんな気持ちだったか想像できるかな。戦争が終わって「満州国」という国は消えてしまったけど、日本と中国両方の国の人たちにもたらした悲しみや苦しみは決して消えないと思う。





右に座っているのがお父さんの外次さん、となりにいるのが桂一君、お母さんのヤエさんとお母さんに抱っこされている1歳6カ月の次雄君、そしておじいちゃんフェルトの帽子がよくにあう4歳の喜久子ちゃん。

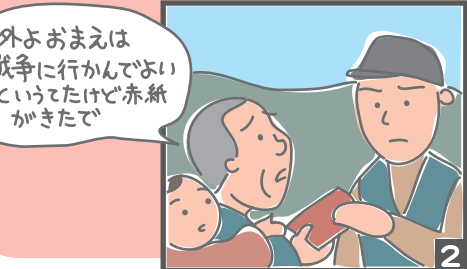


ぼくはあの日のことを 忘れない

いまから60年前、八日市市に住む井上桂一さんの6歳のころのできごとです。花の大好きなやさしかったお父さんは戦場へ。そして家族の思いもむなしく、お父さんは帰ってきませんでした。

えらいものがきよった

昭和18年12月のある日、お父さんとお母さん、そして桂一君は近所の人たちといっしょに近くの山へしば刈りに出かけた。12月になると何度か山へ行き、1年間の燃料にするためにしば刈りをしてきたんだ。枯れ枝などをたくさん集めて大八車に積んで、みんなで休憩していたときのことだった。おじいちゃんが次雄君をおぶって、喜久子ちゃんの手を引いてやってきた。そして、おじいちゃんはお父さんに赤っぽい色をした書類を渡したんだ。それは、軍隊に入りなさいということが書かれた召集令状という書類だった。



しば刈りのこと

雑木林の大木の下に生えている低い木を刈り取ったり、枯れ枝などを集めたりすることをしば刈りという。昔は、しばを使ってごはんを炊いたりおかずをつくらしたり、お風呂をわかしたりするための火をおこしていた。しばは炭とともに、生活にかかせない燃料だった。



ぼくも連れてって

桂一君は、兵隊さんとして出かけていくお父さんを近くの駅まで見送っていったけど、いっしょに列車に乗ってお父さんについていこうとしたんだ。お父さんと別れたくないという気持ちと列車に乗ってみたいという2つの気持ちがあったと話してくれたよ。

チューリップの好きなお父さん

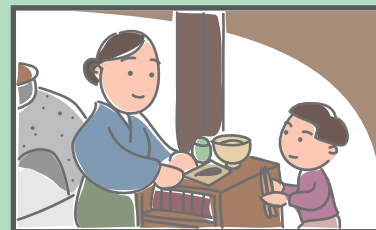
お父さんは、昭和19年5月に戦地へ渡った。お父さんは作物をつくったり集めたりする部隊に所属していた。部隊は、朝鮮半島のピョンヤンや台湾などへと移動して昭和19年の終わりには、フィリピンに上陸した。ピョンヤンにいるお父さんからはハガキが3通とどいた。お母さんはお父さんの好物といっしょに、花が大好きなお父さんのためにチューリップの球根を送ったりした。



桂一さんと、妹の喜久子さん。60年前と同じ松の木が残っている。桂一さんは、お父さんと同じように、花をうえたりして庭をきれいにすることが大好き。

無事に帰ってきますように

喜久子さんはとても小さかったからお父さんのことはあまり覚えていない。それが悲しいって話してくれたよ。でも、お父さんが無事に帰ってくることを祈って陰膳をしたことは覚えている。



遠く離れた家族の無事を祈って、みんなの食事と同じものをそなえることを陰膳といっただ。

悲しい知らせ

お父さんが戦争に行くことを悲しんだおじいちゃんは、お父さんが出かけてまもなくして病気のために亡くなった。お母さんそして桂一君、喜久子ちゃん、次雄君はお父さんが無事に帰ってくることを信じて待っていたけれど、昭和20年7月16日フィリピンのルソン島の山の中でお父さんは病気のために亡くなった。お父さんといっしょにいた兵隊さんが、亡くなったお父さんを山に葬ってくれた。その人はお父さんが亡くなるまでのことを話してくれた。



言えなかったこと

戦争に行きたくないと思っても、行かないでほしいと思っても、「行きたくない」とも「行くな」とも言えなかった。言うことは許されなかった。日本にそんな時代があったことを、みんな決して忘れないでほしいな。



戦争は 終わっても…



昭和6(1931)年に始まった戦争は、昭和20(1945)年8月15日に終わりました。長い戦争は終わったけれど、海の向こうにいた兵隊さんたちや、その帰りをまつ家族、そしてお父さんや息子などを戦場などで亡くした人たちにとって、本当の平和な日々がくるのは、まだまだ先のことでした。

「海が見える 日本海だ」

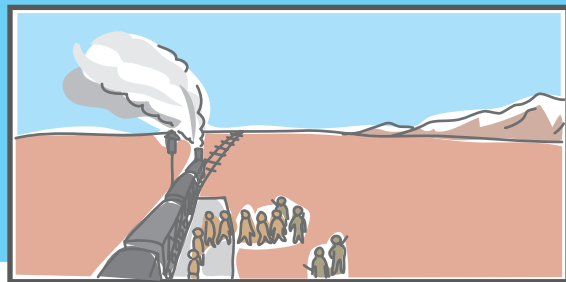
北島敬三さんは19歳で兵隊さんになった。そして、戦争が終わり、ソ連の軍隊につかまった。10月の初めソ連軍から日本に帰れると言われ、おおぜいの人たちといっしょに列車に乗りこんだ。列車での移動は何日も続いた。11月のある日、列車の窓から外をのぞいたら、「日本海」が見えたと思った。だけど、北島さんたちを乗せた列車は、日本とは反対の西へ西へと向かっていた。「日本海」だと思ったのは、ロシアの大きな湖、バイカル湖だった。そして、寒い寒いところにあるこの湖は凍っていた。



甲賀郡甲西町の
北島敬三さん

着いたところは砂漠だった

北島さんたちが到着したところは、いまのウズベキスタンのペゴワードというところ、中央アジアの砂漠のなかだった。発電所をつくる工事をさせられた北島さんたち。半年くらいは亡くなる人が多かったと北島さんは話してくれたよ。北島さんは、2年後の昭和22年9月に日本に帰ることができた。でも、その後もなかなか日本に帰ることができなかった人、亡くなった人がおおぜいいたんだ。



シベリアなどに連れて 行かれた人たち

戦争が終わったとき、いまの中国の東北の方いた日本軍の人たちの多くは、ソ連(いまのロシアなど)の軍隊につかまり、シベリアやいまのモンゴルなどに連れて行かれ、鉄道の建設や森林の木を切る作業などをさせられました。少ない食べもの、厳しい寒さのなかでのつらい作業に、多くの人亡くなりました。

お父さん知らない

高島郡新旭町の安藤良枝さんが生まれる少し前、お父さんは兵隊さんとして出かけ、良枝さんが1歳のとき戦場で亡くなりました。お父さんがいない良枝さんの家では、お母さんは一人、昼も夜も田んぼに出て働きました。良枝さんも学校から帰るとお母さんの手伝いをしました。



お母さんの手づくり

良枝さんが小学1年生のとき、遠足に持って行くリュックサックをお母さんがぬってくれた。学校に行くと、みんなは買ってきたリュックサック。そのときのことを良枝さんが話してくれたよ。「形はにているけど、みんなのリュックサックとは違うんや。みんなが『違う』『違う』と言い出して、私はイヤでイヤで。その時担任の先生が『これが一番ええんや』っていうてくれはったんです。『あー、すくわれた』と思いましたね。」



やっと帰ってきたのに

戦争がおわった次の年の3月、近江八幡市の久保田美津子さんは、夫の仁佐久さんが南の島から帰ってきたけれども、病気がひどく入院しているという知らせをうけました。美津子さんは東京の病院に急いでかけつけました。美津子さんは3人の子どもたちのこと、仁佐久さんは戦場だった南の島のことなどを話しました。けれどもその夜、仁佐久さんは亡くなりました。仁佐久さんのように、やっと日本に帰ってきても、戦場でかかった病気やケガのために、亡くなる人たちがいました。

顔がだんだんきれいに

「お父ちゃんの持って帰った水筒にお湯を入れて、湯たんぼのかわりにして、亡くなったお父ちゃんのそばに三日間いました。戦地でかかった病気のためにはれていたお父ちゃんの顔が、はれもひいてきて、顔がだんだんきれいになってきてね。私になあ、あんな顔見せたらいかんで、きれいになってくんのやろかと思って、もう、おいしいように思いました。」と美津子さんはつらかったことを話してくれました。



考えてほしい戦争のこと

ソ連などに連れて行かれた兵隊さんがいた。やっと帰ってきても病気のために亡くなった兵隊さんがいた。戦場で手足を失ったり、目が見えなくなったりした兵隊さんがいた。働き手のお父さんを戦争で亡くした家では、お母さんも子どもたちも生きていくために必死で働いた。戦争が終わっても、戦争のために起こったつらい日々は続いた。そんなことがあったなんて、みんなには信じられないかもしれないけど、おじいちゃんやおばあちゃんは50年以上も前のできごとを本当によくおぼえていて話してくれたよ。おじいちゃんやおばあちゃんは悲しかったことやつらかったことを、ずっと心のなかにかかえてきたんだということを感じるよ。そして、その悲しみやつらさを思うとき、いったいなぜこの地球から戦争はなくなるのだろう?と思うんだ。

滋賀県民が関係した戦場

日本軍は、中国、アメリカ、イギリス、インド、オランダ、オーストラリアなどの軍隊と戦いました。滋賀県からも多くの人たちが日本軍の一員として、広い戦場のあちこちで戦いました。

この戦争で亡くなった日本軍の人たちは、行方不明者もふくめて230万人といわれています。

そのうち、3万2592人の滋賀県の人たちが亡くなりました。なかでも、フィリピン、中国、インド、タイ、ミャンマー、ニューギニア島周辺、沖縄は激しい戦いがあったところで、亡くなった方の多い地域です。

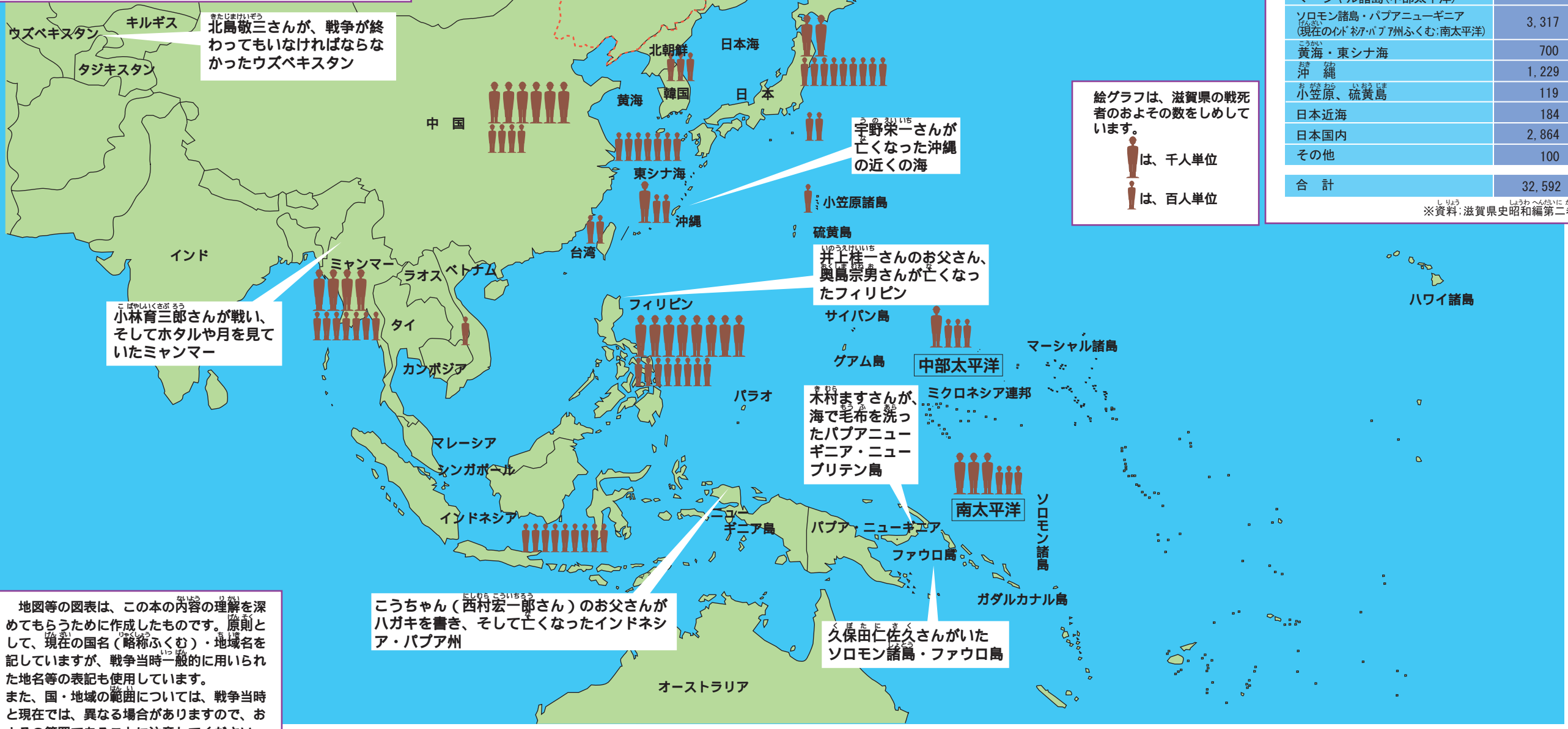
戦場となった東アジア・東南アジアの国々では、2000万人以上の兵士や一般市民が犠牲になったといわれています。

北島敬三さんが、戦争が終わってもいなければならなかったウズベキスタン

小林育三郎さんが戦い、そしてホテルや月を見ていたミャンマー

こうちゃん（西村宏一郎さん）のお父さんがハガキを書き、そして亡くなったインドネシア・パプア州

久保田仁佐久さんがいたソロモン諸島・ファウロ島



絵グラフは、滋賀県の戦死者のおよその数をしめています。
 大人は、千人単位
 小人は、百人単位

地図等の図表は、この本の内容の理解を深めてもらうために作成したものです。原則として、現在の国名（略称ふくむ）・地域名を記していますが、戦争当時一般的に用いられた地名等の表記も使用しています。また、国・地域の範囲については、戦争当時と現在では、異なる場合がありますので、およその範囲であることに注意してください。

滋賀県民の戦死者数 (人)

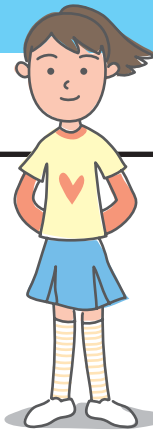
国・地域など	戦死者数
フィリピン	8,843
インドネシア	871
ベトナム・ラオス・カンボジア	106
インド・ミャンマー・タイ・マレーシア・シンガポール	4,668
中国	6,395
中国東北部(旧満州)	839
台湾	193
朝鮮半島	251
ロシアなど(旧ソ連)	420
小笠原諸島、サハリン、アリューシャン列島(北太平洋)	137
パラオ、ミクロネシア連邦、マーシャル諸島(中部太平洋)	1,356
ソロモン諸島・パプアニューギニア(現在のインドネシア州ふくむ:南太平洋)	3,317
黄海・東シナ海	700
沖縄	1,229
小笠原、硫黄島	119
日本近海	184
日本国内	2,864
その他	100
合計	32,592

※資料: 滋賀県史昭和編第二巻

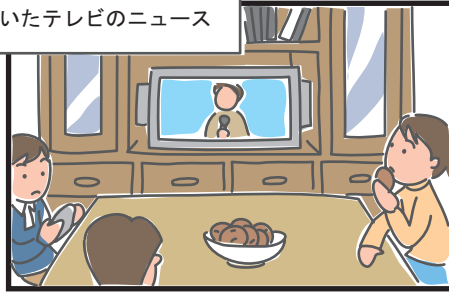
平和のたまごの物語

1. なくなる戦争

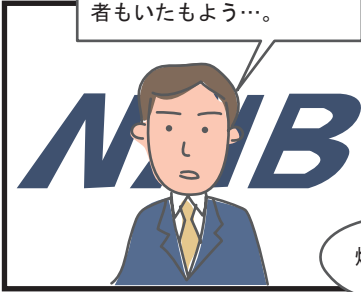
わたしは、なつき。小学6年生。
 家族はお父さん、お母さん、2つ下の弟のたかしの4人。
 弟とはケンカばかりしていたけど、
 あのころからはそんなにケンカもしなくなった。
 ほんの少しだけど、
 争うことのむなしさがわかったからかなって思っている。



ある日、何気なく見ていたテレビのニュース



…爆撃があり、市民の犠牲者もいたもよう…



爆撃？ 市民の犠牲？



お父さんどう
いうこと？



たくさんの方が
死ぬんやろか。



世界中のいろいろなところで
戦争があるんや。日本もむかしは戦争してたことがあったんや。



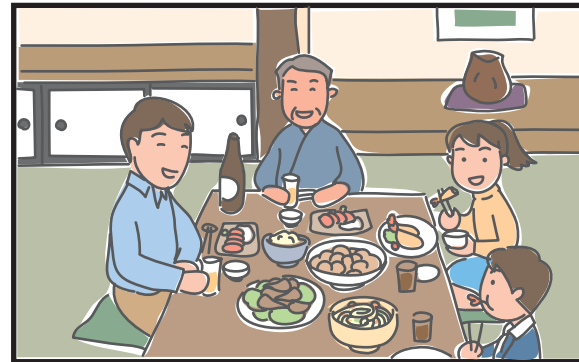
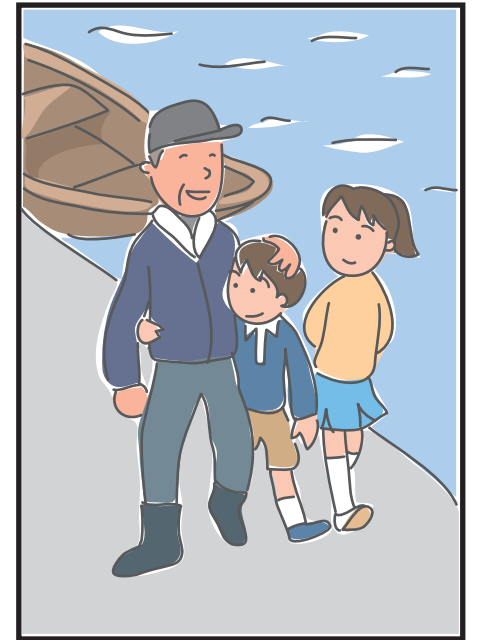
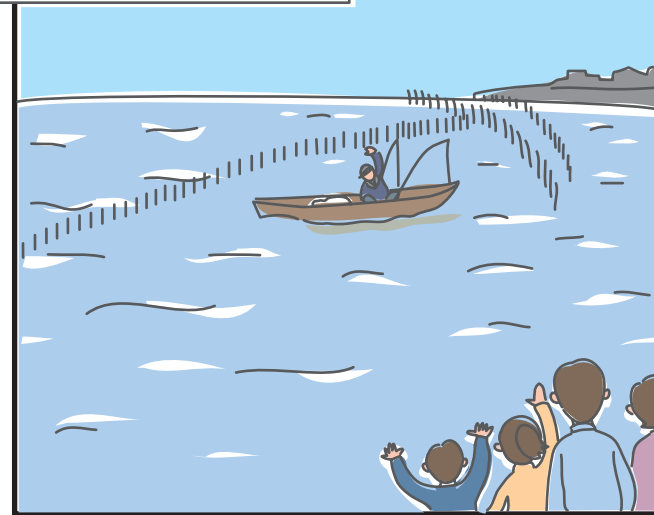
エイッ



戦争になったら兵隊さんだけじゃなくて、子どももお年寄りも関係なく、多くの方が亡くなったり、ケガをしたりするんじゃない？

2. 古ぼけた一枚の写真

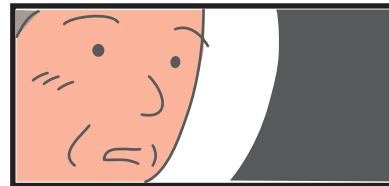
日曜日、家族みんなで琵琶湖の漁師をしているおじいちゃんの家に行った。



おじいちゃんが子どものころ、戦争があったん？



じいちゃん、戦争に行ったんか？



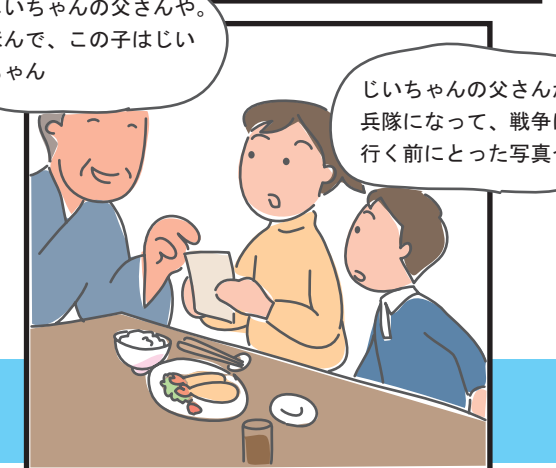
だれの写真？



じいちゃんのお父さんや。ほんで、この子はじいちゃん



これ見てみ



じいちゃんのお父さんが兵隊になって、戦争に行く前にとった写真や。

60年ほど前、日本は長く大きな戦争をした。おじいちゃんのお父さん、私のひいおじいちゃんも琵琶湖の漁師だった。ひいおじいちゃんは、戦争が激しくなったころに兵隊さんになって遠い南の島に行った。

戦争が終わって、お父さんは帰ってきた？

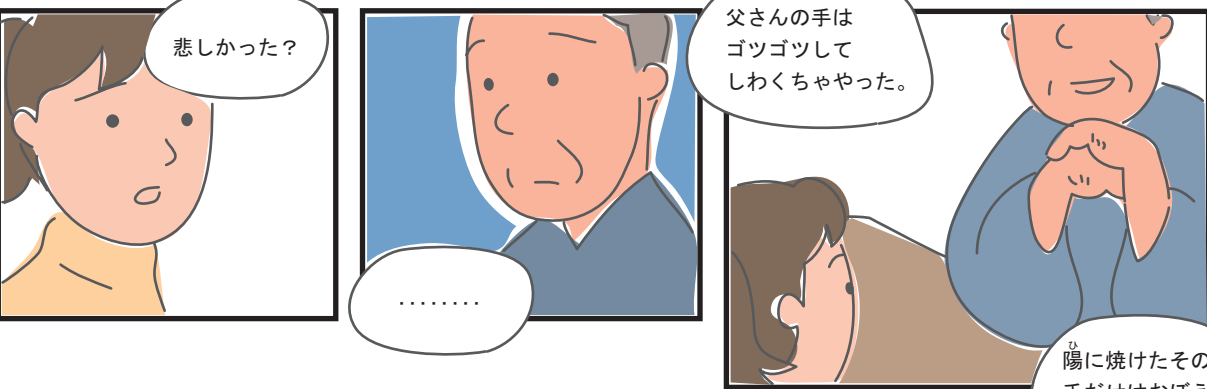
帰らへんかった。死んでもた。



悲しかった？

父さんの手はゴツゴツしてしわくちゃやった。

陽に焼けたその手だけはおぼえてるわ。



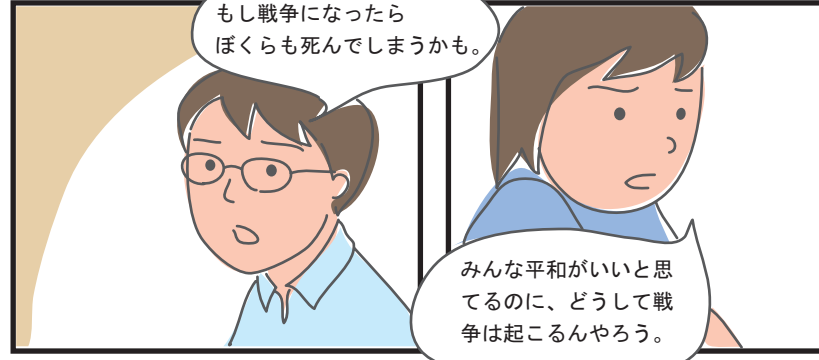
3. 平和のたまごを育てよう

社会の授業で、60年前の戦争のことを習った。多くの男の人が兵隊さんになって、遠い外国に行ったこと、空襲という空からの攻撃でふつうに暮らす人たちも犠牲になったことなどを知った。

戦争について、みんなが調べたことや思ったことを発表し、話し合った。



私は、戦争で死んだひいおじいちゃんのこと、だれもが平和を望んでいるのに、これまでも戦争は繰り返し繰り返し起こってきたことを話した。そして、むずかしいことかもしれないけれど、これからも戦争のこと、平和ってなんなのか考えていきたいと言った。



もし戦争になったらぼくも死んでしまうかも。

みんな平和がいいと思ってるのに、どうして戦争は起こるんやろう。



戦争に賛成する人たちもいるやろ。



反対する人たちもいる。



地球はまだ平和のひよこくらいかな。

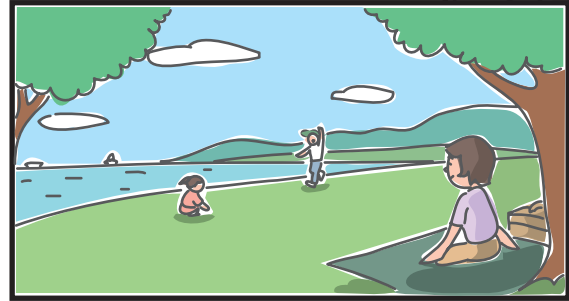
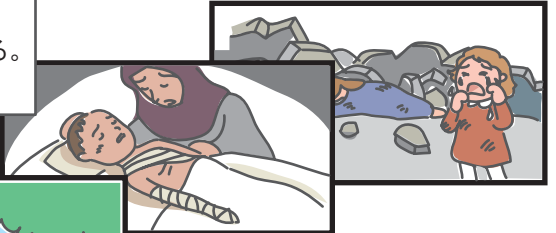


たまごやな。地球は、まだ平和のたまごや。



そして、クラスみんなで平和のたまごの絵をかいた。みんなで考えた平和のたまご。完成したみんなのたまごの絵は、掲示板にはられた。学校のホームページにものった。

戦争をはじめるのはおとな。おとながはじめた戦争に子どもたちは泣いている。わたしは戦争なんか大キライなおとなになる。平和が大好きなおとなになる。



私たち一人ひとりも平和のたまご。いつかそのたまごは平和な地球にかえる。

※このお話は、実在の人物、学校等とは関係ありません。

「世界」と「いま」につながっている滋賀県と戦争

いまもしキミがこの本を読み終わったなら、もういちど地図をみてみることをおすすめします。この本にでてきたいろんな人のものがたりが、その地図のどこにつながっているかを思い出してみてください。

こうちゃんのお父さんは、いまのインドネシアで、こうちゃんにハガキを書きました。小林さんは、いまのミャンマーで、ホテルや月をみていました。木村さんはいまのパプア・ニューギニアの海で毛布を洗っていました。奥島さんのお兄さんや、井上さんのお父さんはフィリピンで亡くなりました。宇野さんは沖繩の近くで亡くなりました。小さなあっちゃんは、いまの中国にいました。北島さんは、戦争が終ってもいまのウズベキスタンにいました。

なぜなら、そこが「戦場」だったからです。そして、その戦場となった場所には、そこで暮らしている人たちのほかに、アメリカやイギリス、オランダやインド、ロシアなどの人たちもいました。

戦争の時、日本国内でも、多くの人たちがいのちをおとし、家族を失い、家を焼かれたことをみんなは知っていると思います。なぜなら、日本が「戦場」だったからです。

だとすれば、同じように「戦場」だった日本以外の場所ではどうだったのでしょうか？同じように多くの人がいちのちをおとし、家族を失い、家を焼かれたのでしょうか？そのとおりです。この本にでてくるものがたりと同じような、悲しいできごとがあり、世界中で家族の帰りを待つ人たちがたくさんいて、多くの人死んでいく——それが「戦争」なのです。

こんどは世界地図をさがしてきて、世界のことをみてみましょう。いまもいろんな場所が「戦場」になっています。そして、そこでは、いのちをおとし、家族を失い、家を焼かれているおおぜいの人や、そこで武器を持って戦争をしている人がいます。なかには、この本にでてくるような戦争を体験した人たちの子ども、子どもの子どもの子どもがいるのかもしれない。

もしキミが「どうして戦争はなくなるの？」と思うならば、キミはいま、世界とつながっています。それは、キミがいま、滋賀県と戦争のことを知ったからです。いま、キミの心のなかに「平和のたまご」ができました。世界中の人たちが、キミと同じような「平和のたまご」を心のなかに持っていることを信じて、もういちど世界地図をみてみませんか。

しらべてみよう！ 世界の戦争のこと・平和のこと

まずどこからはじめればいいのか？

いろんな方法があるよ
たとえば

新聞と世界地図を てらし合わせる方法

○新聞にでてくる戦争などがおこっている場所や平和をとめる運動がおこなわれている場所を、世界地図のうえにチェックしてみよう。

インタビューしてみる方法

○キミたちのお父さんやお母さん、おじいさんやおばあさんに、いままで世界で戦争のあった場所を聞いてみよう。それを地図にチェックしてみよう。

資料をさがしてみる方法

○地図にチェックした場所が、いまどんなところかを本やインターネットで調べてみよう。その場所にどんな人たちが住み、どんな暮らしをしているのかを調べて、キミの考えたことや感じたことをメモにしておくといいよ。
○世界の人たちが平和をもとめて、どんなことをしているのかもあわせて調べておこう。

調べたあとはどうするの？

みんなで話し合ってみよう

○世界地図やメモをもちよって、調べたことをみんなでくらべ、話し合ってみよう。平和のたまごをひなにかえすために、キミにはどんなことができるのかな？

<資料提供>

守山市立守山中学校

滋賀県と戦争のことをもっと知りたかったら
「バーチャル平和祈念館」というホームページをみてみよう
<http://www.pref.shiga.jp/heiwa/>
Eメール ea00@pref.shiga.jp

わからないことや相談したいことが
あったら電話してみよう

滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
(077) 528-3514

戦場にみる滋賀県民の戦争体験
戦争なんか大キライ3

平成16年3月発行
編集・発行 滋賀県健康福祉部健康福祉政策課
〒520-8577 大津市京町四丁目1-1
企画・編集協力(株)シー・ディー・アイ
デザイン 川添佐代子